大学生協九州事業連合　共通カリキュラム化を通じた ２０１６年度ＰＣ講座改善に向けた取り組み

北村 士朗[*1*6]・板倉 隆夫[*2*7]・熊澤 典良[*3*7]・上村 隆一[*4]・小林 陸生[*5]・田村 達哉[*8]・村中 誓司[*5]・樋口 直樹[*5]・松浦 和規[*9]・三重 浩通[*5]
Email: kitamura.shirou@nifty.com

*1: 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻
*2: 鹿児島大学水産学部
*3: 鹿児島大学大学院理工学研究科
*4: グローバルコミュニケーションクラウドサービス株式会社
*5: 大学生協九州事業連合
*6: 熊本大学生活協同組合
*7: 鹿児島大学生活協同組合
*8: 全国大学生協連合会
*9: 大分大学生活協同組合

◎Key Words ＰＣ講座，情報教育，カリキュラム共有化

1. はじめに

筆者らは大学生協九州事業連合とＣＩＥＣ九州支部のジョイントプロジェクトとして「情報生活サポート研究会」を立ち上げ、大学生協九州事業連合におけるＰＣ講座の改善とビジネスモデル自体の刷新、スマートフォンやタブレットへの対応などに関する調査・検討などを行っている。

本発表では、その一環として取り組んだ、2016 年度 PC 講座カリキュラム共通化の取り組みについて報告する。

2. PC 講座カリキュラム共通化の概要

2.1 共通化以前の問題

大学生協九州事業連合内のＰＣ講座においては長年に渡りりカリキュラム（含配布資料およびスライド）制作が各会員生協（以下「各生協」と略）独自に行われていた。その内容はおおむねパソコンの基本操作、メールの送受信、オフィスソフトの操作、レポートの書き方といった汎用性が高い内容がほとんどであり、各大学のシステムの利用方法など若干の独自な部分を除けば各生協間で大きな差違は無かった。したがって、各生協で PC 講座にかかわる学生スタッフ（以下「PC 講座スタッフ」と略）は、同時期にほぼ同じ内容のカリキュラムを別々に制作しており、事業連合全体で見れば重複した作業となっていた。このことは、効率面以外でも以下のような問題につながっていた。

① 取り上げる項目の取捨選択が PC 講座スタッフに一任されていたため、担当スタッフの好みや得手不得手などによる偏りが発生するケースがあった。
② 配付資料やスライドのブラッシュアップが困難だった。各生協それぞれに全ての回のカリキュラム制作をする必要があったことから、各回分それぞれに費やせる時間は分散せざるを得なかった上、講座スタッフの能力や経験への依存が過度だったことがその大きな原因であった。加えて内容の点検も内部的に行われてたため、誤記などの問題個所が見過ごされがちだった上、改善を要する点についても気づかれないことが多かった。
③ 各生協のコピー機や簡易印刷機を用いて印刷している上、作業にかかわる PC 講座スタッフの人件費が発生していたためコスト高になっていた。また、印刷費が Hidden Cost 化してしまい把握や分析が困難になるケースがあった。
④ 多くの場合、講座の各回直前まで配付資料を作成し続けた上で印刷していたため、PC 講座スタッフが講師や TA（Teaching Assistant）としての講座準備に時間を割くことが困難となり、講座品質の向上の妨げとなっていた。
⑤ コピー機や簡易印刷機 での印刷であったため印刷品質が低く、製本もステープラーでとめただけであったため見栄えが悪いケースが多かった。白黒印刷も多かったためスクリーンキャプチャが見にくいといった問題も発生していた上、受講者や保護者にチープな印象を与え、募集の妨げともなっていた。

上記の問題もあって、開催されていた PC 講座の多くは受講キャンセル率・出席率がおもわしくない状況にあり、各生協のＰＣ講座担当職員や講座スタッフの努力にもかかわらず改善が見られなかったことから、抜本的な対策が求められた。

2.2 共通化の取り組み

そこで打ち出されたのが、カリキュラムや教材類の共用を前提に各生協間で分担制作し、相互点検・相互評価やコメントしながらブラッシュアップしていく、カリキュラムの共通化である。

共通化に期待した効果は、第１に作業重複の解消によるカリキュラム作成や開講準備の効率化である。コストダウンはもちろん、カリキュラム制作作業を分散し各生協が担当回に集中することで内容が充実するこ

とも期待された。

第２に相互点検・相互評価、ノウハウなどの共有を通じたカリキュラムや講座の質の向上である。それまでも事業連合内で交流はされていたものの、各生協のカリキュラムの違いが障壁になって、表面的な情報交換にとどまる傾向があった。これに対して共通カリキュラムという土台ができることでより深い議論がなされることが期待された。

2013 年に検討始まった共通化への取り組みは、2014 年から本格化した。共通化への参加は九州事業連合内の各生協の任意とした。2016 年に向けては所属する１７生協中６生協の参加が得られている。

2014 年以来の議論や検討が奏功し、2015 年度には配付資料とスライドが共用できるレベルに達した。配付資料は Word ファイルで分担作成され、各生協間で相互チェックした上でファイルとして配付し、各生協がそれぞれ印刷した。

2015 年度の取り組みの結果、出席率について改善が見られ、受講者の満足度が向上したことが伺えた。また、受講申込者数も増加するとともに、担当職員 PC 講座スタッフの取り組みにも変化が見られ、それぞれの学びや成長への好影響が確認された。一方で費用については上昇した。これは、過渡期ならではの作業量の増加が原因と推測されている。

前述した共通化以前からの問題のうち、①取捨選択の偏りについては参加生協間での検討・吟味によって軽減され、②配付資料やスライドの質についても参加生協間での相互点検や模擬授業などでの相互コメントによって高めることができ、問題個所の見過ごしも大幅に減少した。

一方で③印刷のコスト、④PC 講座スタッフの講座準備時間の確保⑤低い印刷品質といった問題は残っていた。また、生協によっては共通化されたカリキュラムをカスタマイズし、そのための作業が講座準備を圧迫していた。また、カスタマイズされた配布資料類は他生協との相互点検を経ずに受講者に提供されたため、品質などに問題があるケースもあった。

そこで、印刷に関係する問題である③～⑤への対処として、以前から取り組んできた内容などの改善に加え、共通カリキュラム分について、参加生協分の全テキストを一括して印刷会社へカラー印刷で外注（以下、「一括印刷外注」と略）することが検討された。

2014 年に参加生協のひとつが全ての回次分の配付資料を開講前に一括（２冊に合本） して印刷会社への印刷（白黒）・製本の外注を試行したところ、コストダウンや講座準備時間の確保につながったことが確認されたこともあり、2016 年度に一括印刷外注に踏み切ることとした。

3. 2016 年度 PC 講座に向けての取り組み

3.1 取り組みの概要

一括印刷外注を前提に、2016 年度に向けて以下の会議・研修・タスクを中心にカリキュラム制作と開講準備を進めた。

表 1：2016 年度に向けた会議・研修・タスク

2015 年	
5 月 26 日	第 1 回担当職員会議
7 月 3 日	第 2 回担当職員会議
9 月 26 日	第 1 回 PC 講座スタッフ研修
9 月 27 日	共通カリキュラムタスク （2015 年振り返り、今後の進め方）
11 月 14 日	第 2 回 PC 講座スタッフ研修
11 月 15 日	共通カリキュラムタスク （各講の改善点の検討）
12 月 5 日 ～6 日	共通カリキュラムタスク （模擬講座）
2016 年	
1 月 16 日 ～17 日	共通カリキュラムタスク （模擬講座）
2 月 16 日	第 3 回講座スタッフ研修 共通カリキュラムタスク （テキスト作りの進捗状況確認）
（3 月）	（新入生サポートセンターでの募集）
3 月 10 日	テキスト原稿完成、印刷会社へ入稿
4 月 2 日	テキスト冊子完成 →各生協へ納品完了
4 月初旬	開講

上記の会議・研修・タスクの間は各生協が分担された作業（検討・執筆など）を行った。その際には情報共有や相互点検・コメントのツールとして、無料のグループウェアであるサイボウズ Live を用いた。

3.2 一括印刷外注に向けて

一括印刷では各生協でのカスタマイズが不可能となる上、追加資料作成などに費やす時間を最小化する必要があったため、各生協での講座実施の妨げとならないよう過不足が無い汎用性が求められた。

2015 年度も項目の取捨選択について各生協参加の上で検討し一応の結論は得たものの、実際に講座で使用するにあたり、項目の削除／追加や説明の追記などのカスタマイズをする生協が散見され、汎用性を高めるための検討の余地があることが示唆されていた。

そのため、2016 年度に向けて PC 講座スタッフ会議や共通カリキュラムタスクで内容、構成や体裁に関して入念な検討がなされた。

その結果、内容は以下の通りとなった。

＜第 1 分冊＞

ＰＣ知識

①：ＯＳについて、基本操作、更新プログラム、ウイルス対策、ＰＣの扱いに関する注意、ＰＣ用語の説明

②：ネット接続（ＬＡＮ），ウイルス、ＭＳアカウント、Apple ID、強制終了、単語の登録、ＰＣ用語の説明

③：メールの違い、目上の方に対するメールの送り方、著作権、パソコンの基礎単語、インターネットの仕組み、ネチケット

④：クラウドの基礎、One Drive、One Note
Word
①：タイピング上達のコツ、レポートについて、WORD について、レポート作成時に使える Word の機能、著作権、その他の役立つ機能
②：レポート作成時に使える Word の機能、様々な種類のレポート、参考文献について、引用の際の注意事項
＜第２分冊＞
Excel
l①：Excel の基本、Excel における計算方法、基本の関数、ミニテスト
②：各種関数（基礎・発展）、ミニテスト
③：便利な機能、グラフ、ミニテスト
Power Point
①：スライドの基本、挿入、デザイン、画面の切り替え、アニメーション、スライドショー、発表者ビュー、ショートカットキー
②：よいプレゼンテーションとは、スライド作りの工夫、聞くコツ、発表のコツ

また、一括印刷外注の入稿方法を、印刷会社で校正や編集を一切行わない完全版下入稿としたため、原稿において

- 構成や体裁（フォントサイズ、フォント種類、デザインなど）の統一
- 誤記や誤字・脱字などの無さ

が求められた。

前者については2015 年度以前からも、統一をはかってきたものの、必ずしも十分とは言えず、分担した生協間での差違が見受けられた。一部の生協では使用にあたり体裁の修正作業を行っていた。完全版下入稿による一括印刷では印刷後の修正が一切できなくなるため、より一層の徹底が求められた。

＜体裁に関して定められたルールの代表例＞

(1)フォント
- 大タイトル→メイリオ 20point
- 小タイトル→メイリオ 12point
- 本文→丸ゴシック 12point
- 余白：「狭い」

(2)ページレイアウト
- タイトル背景、見出しデザインの統一
- フッタのページ数表示：ページ左右に白抜き

(3)各章名
- 「編名＋丸数字」に統一（例：Excel①）
（前年までは「第○講」と記載されていたが、各生協間で学習順が異なるため変更）

(3)用語類の統一
- 講座名：「パソコン講座」
（従来は「パソコン活用講座」も併存）
- 固有名詞（大学名等）を使わない

(4)その他
- スクリーンショットを太さ：1.5 の枠線で囲む
- スクリーンショットを取る OS と Office の
バージョンの統一
OS：Windows10、Mac OS X El Capitan、Office：2016
- 顔文字を用いない

上記の内容・ルールで各生協が執筆した原稿は入稿前に執筆担当以外の生協によって点検され、模擬講座の場やサイボウズ Live 上でフィードバックされた。

4. 取り組みの結果

筆者らは、上記の取り組みによって以下の効果が得られたと考えている。

① 配付資料の印刷・製本品質が飛躍的に向上した。カラー印刷のため視認性、特にスクリーンキャプチャが大幅に向上し、学習のしやすさにつながった。また、カラー印刷＋製本で高級感が演出できた。来年度以降、サポセンでの募集でのアピールの好材料になることが期待される。

② 「自分たちも使う」という前提での真摯な相互点検を通じて、配付資料の品質が向上した。誤記、誤字・脱字や著作権上の問題発生を防止することもできた。従来は模擬授業での講師の話し方やスライドの相互点検が中心になりがちであり、テキストの相互点検には、「自分たち（各生協）でカスタマイズ可能」という前提のもと、そららに比べ時間が割かれていなかった。

③ テキストの内容も「そのまま自分たちが使う」前提で検討・議論されたため、偏りが少なく汎用性が高いものとなった。本稿執筆時点で各生協は講座において基本的には本配付資料のみを用いており、各大学のネットワーク利用などに関するルールや情報を提示するための補足資料以外の追加資料は作成・使用されていない。

④ 配付資料を相互点検し、改訂などについて議論することで、内容や各回の進め方についての理解が深まり、ノウハウの創出・共有も活発になった。実際、模擬講座での講師のインストラクションや講座の進め方、そしてそれらに対するフィードバックや議論のレベルアップが見られた。

⑤ 模擬授業などの開講準備や受講者募集活動により多くの時間を割けるようになった。各大学独自にテキスト作成している際には開講後の各回の直前までに、共通化後もファイル配布されていた 2015 年度までは３月下旬までに異配付資料を作成・印刷すればよかったため、配付資料作成・印刷と講座が併行して行われ、講師や TA としての講座準備が十分にできていない生協が多く見られていた。

一括外注印刷に伴い、そのスケジュールが大幅に変わった。脱稿が３月初旬に前倒しされ、テキスト作業のスケジュールはタイトになったものの、従来はこの時期に行われていたカリキュラムの制作・カスタマイズや印刷といった作業が無くなった。そのため、脱稿後おおよそ３月一杯に渡りに開講準備や新入生サポートセンターでの募集活動に時間を割くことができた。これは受講者募集にも好影響を与えた。受講者数は期首で 4,005 名となった。この中には、体制の問題から受講者定員を例年より大幅に減らした生協分が含まれており、それらが例年並みに募集できたとすると受講者数は 4,250 名程度（約 200 名増、対前年比約 105%）となった

ものと推察される。
募集現場では新入生や保護者に対して、講座内容や進め方について積極的に説明するＰＣ講座スタッフが多く見受けられた。これには④内容などへの理解も影響していると考えられる。

なお、印刷コストについても改善が期待されるものの、前年度に各生協が期中にも印刷し、費用発生が分散されていたことから通期での比較が必要となるため、本稿執筆時点では確認できていない。

上記の通り、一括印刷外注には印刷物としての品質向上のみならず、内容の精査や講師・TA としてのスキルアップを通じた講座品質全般の向上への寄与が見受けられた。

このような一括印刷外注でのメリットを享受するには、高品質な原稿を作成するマンパワーの質・量とスケールメリットが発生する冊数の確保が必要不可欠であり、それはカリキュラム共通化によってのみ実現されると筆者らは考えている。

5. 今後の課題

今後の課題として以下の点が挙げられる。

5.1 配付資料の構成や内容の検証

本年度の配付資料を様々な角度で検証し、調整をはかる必要があろう。テキストの各章間に表現や説明の粒度、ミニテストの有無などの差違が残っている。これは、まず一括印刷外注を実現することを最優先としたためである。これらについての検証や調整が必要である。また、学習項目などの内容や教材としての使い勝手についても、講座実施の結果を踏まえ再検討する必要がある。

5.2 配付資料の効果的な利用法の検討

今回作成した配付資料を効果的に利用した講座の進め方を検討する必要がある。

2015 年度以前は配付資料は補助的なものとして扱われがちであった。操作手順については講師の口頭説明やスライドに依存する傾向があり、受講者全員が講師やＴＡの指示にしたがってってStep By Step で操作を進める一斉授業的なスタイルがとられるケースが多かった。

今回作成したテキストは操作手順がスクリーンキャプチャも用いて詳細に説明されており、おおむね「見れば分かる・できる」レベルに達している。そのため一斉授業ではなく、受講者が各自のレベルに合わせたスピードで学習を進め、講師やＴＡはそのサポートをする、といった個別学習スタイルでの講座が可能となっている。そして、新入生である受講者のＩＣＴやＰＣに関するスキルや経験が様々である以上、個別学習スタイルが学習上望ましいと考えられるが、その実現には講座スタッフの講座への考え方をシフトする必要があろう。

また、今回作成の配付資料は汎用性を重視し、学習項目を講座で説明する内容のみにほぼ絞り込み、講座時間内に使う性格のものになったが、次のステップとして、講座時間外での発展的な学習にも利用可能とすることを検討したい。例えば講座の時間内では扱わない項目や詳細な内容、演習課題などについても追記し、講座内での説明を省略する（例：「興味がある方はテキストの○ページをご覧ください」「詳細についてはテキストの○ページをご覧ください」）、あるいは講座時間外の学習に用いる（例：「練習問題としてテキスト○ページをやってきてください」）といった用途を配付資料の内容と講座の進め方の両面から検討していきたい。

5.3 工程管理方法の検討

原稿作成途上では、原稿の納期が守られない、相互点検でのコメントが遅延する、相互点検者の改訂要請に対する対応が遅れる、等の問題も発生した。

サイボウズ LIVE 上での投稿などから各生協の進捗状況を推測し、問題がありそうな場合のみ個別に注意喚起などをしてきたが、より精緻な工程管理方法を要否も含め検討したい。

5.4 共有する生協の拡大

より一層のコストダウンや品質向上のための作業分散を行うには、共有カリキュラムへより多くの生協が参加することが望ましい。前述の通り、カリキュラム共有化への参加は各生協の任意としているため九州事業連合内には不参加の生協がある。参加を任意とする方針は当面変更しない予定であるため、それら不参加生協の理解を得るように努めたい。また、将来的には九州事業連合外との共有も検討していきたい。

ただし、参加生協間の連携を確立するのは決して容易ではない上、作業の分散により講座へのかかわりが薄くなったと感じ、モチベーションダウンしてしまうＰＣ講座スタッフも見受けられており、この点への配慮も必要であろう。

6. おわりに

本稿では九州事業連合における PC 講座カリキュラム共通化の 2016 年度の取り組みについて、一斉印刷外注を中心に報告した。

一斉印刷外注は、カリキュラム共有化のひとつのゴールと言えよう。一方で、やっと「カリキュラム共有化」という前提が整い、スタートラインに立つことができた、とも考えられる。カリキュラム共有化以前の問題の多くには対処できたものの、出席率・キャンセル率といった事業面での指標、受講者の満足度や最終テストの結果、修了後の有用性などには、まだまだ改善・改革の余地がある。これらに対し、筆者らは共有カリキュラムを前提に検討し、取り組んでいく所存である。

参考文献

(1) 北村他：“大学生協ＰＣ講習会の改善および『情報生活サポート』事業構想の提案”，2014PC カンファレンス全国大会（札幌学院大学）発表論文集，pp. 338-341（2014）.
(2) 北村他：“大学生協九州事業連合ＰＣ講座 統一カリキュラムの評価・分析”，2015PC カンファレンス全国大会発表論文集，pp. 143-146（2015）.
(3) 樋口他：“九州の大学生協 PC 講座統一カリキュラムの取り組み”，2015PC カンファレンス全国大会発表論文集，pp. 141-142（2015）.